

<<東北魂>>を鼓舞する
電子新聞

発行所 株式会社遊無有
〒207-0015
東京都東大和市中中央 1-539-15
http://www.yumuyu.com/
e-mail:y.s.yumuyu@ozzio.jp

東北再興

Re-Create, TOHOKU!

2021年(令和3年)11月16日 火曜日

無料

第114号

毎月発行

発行 2021年(令和3年)11月16日 火曜日

【当新聞発行責任者 兼編集長兼記者紹介】

【砂越 豊】

宮城県生まれ、68歳の新人歴史映像作家兼プロデューサー。3作目の「古代製鉄の埋もれた歴史を発掘した映像」の【奪われた古代鉄王国】の「大崎新4型作趣意」を研究する。この文化発掘を



これまでのNHK朝ドラと明らかに違った【おかえりモネ】が東日本大震災被災地と被災者たちを大胆にも描き出した！

これまでのNHK朝ドラとは明らかに違って、いつもであれば放送スタート前に、鳴り物入りでしつこいほど番組宣伝するNHK朝ドラなのに、この「おかえりモネ」はほとんど宣伝がなかったように感じた。新型コロナ禍の最中に、静かに、まるで裏番組のように始まったように思えた。それだけでなく、最初から、従来のNHK朝ドラとは明らかに違ったテイストの朝ドラだった。

主人公のモネも、物静かで騒がしくない。セリフも極端に少なく、万事においてとても活発な現代っ子女子のように見えなかった。内に秘めた思いをときどきのぞかせるが、最後まで「本音」は見せない。そんな主人公を中心に展開するNHK朝ドラ。何か様子が違うなど思いつつ、何かに惹きつけられるように筆者は毎回食い入るように放送を見続け、そして最後まで見終わった。

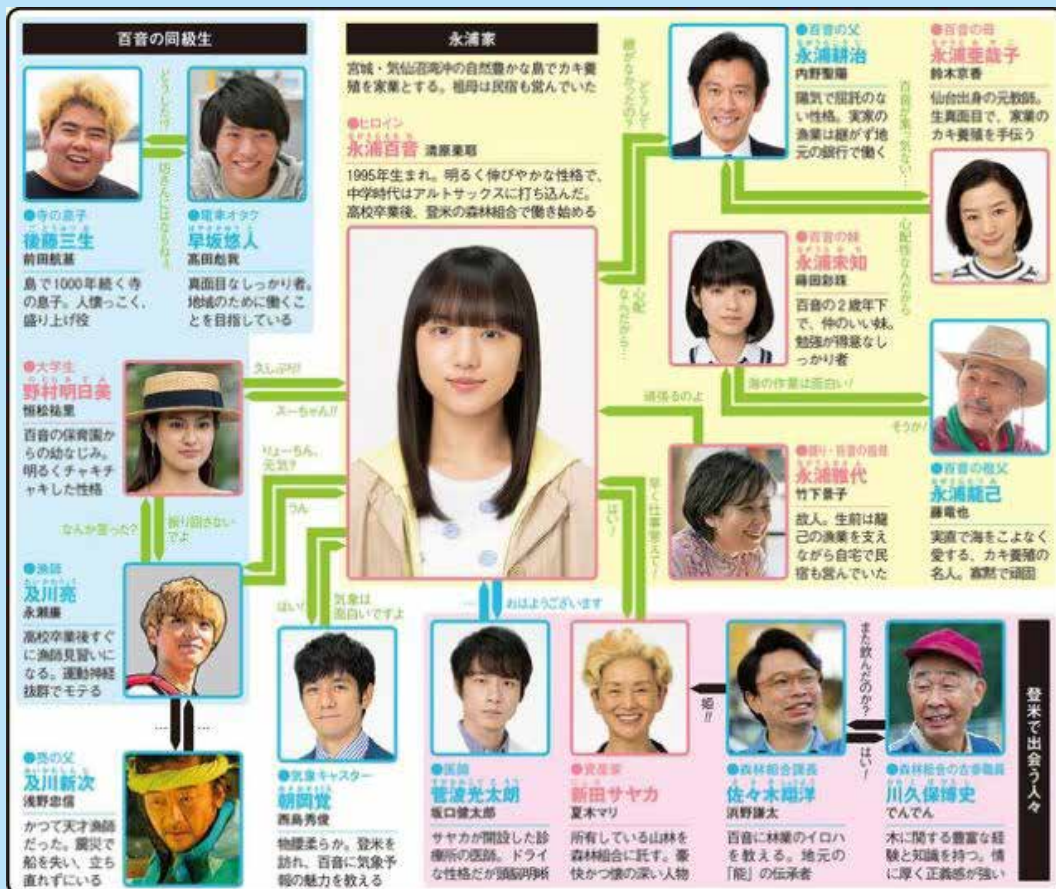
仙台では視聴率突出。そうした地味な作りのせいか、平均視聴率は低調であった。十六・三パーセントという数値。とはいえ、従来のNHK朝ドラと比べて極端に低いというわけでもない。だが、この平均視聴率の地域別の分析を加えると興味深い。関東では十六・三パーセント。関西では十四・二パーセント。そして仙台地区では何と十九・六パーセント。

ドラマの舞台が宮城県の気仙沼や登米市であり、そして東京であり、他方、関西の出番はない。撮影場所から考えれば当然の結果かもしれない。急に東日本大震災の被災の話に展開する。ドラマ序盤の撮影地域は、気仙沼湾の離島であり、ほどこなく内陸の登米市に移る。登米市は筆者の故郷に近

いので、一層興味を引いた。そこから、基本モチーフが大震災から九年(撮影時期は昨年)を迎えた被災地の状況へと変化し、視聴者はそこにずるずると引きずり込まれていった。筆者は、NHK朝ドラで、大震災九年後の被災というものを真正面から取り上げるなど想像もしていなかった。同時に、朝ドラでこの「重いテーマ」を取り上げるといふ関係者の勇気に驚きもした。

ただでさえ、このテーマは重いのである。できれば触りたくないテーマ。できれば素通りしたいテーマ。真実を知れば知るほど、覆い隠したいテーマ。いずれも真正面から向き合い、考えなくてはならないテーマだが、すごく気力も体力も要求されるテーマである。日常にあっても、いきなりこのテーマに切り込むだけ、被災地に直接の関係のない人間は尻込みするし、直接の関係者ならば、まだ癒えない傷口を再び開かれるように拒絶反応さえ予想されるのである。

それをNHK朝ドラで、真正面から切り込んでいく勇氣には敬服した。この朝ドラが、どれだけ被災者の心情をすくい上げられたかどうかという問題よりも、取り上げること自体がすごいことであると筆者は考える。被災者のまだ癒えない傷口を再び開こうという「暴挙」にも敬服する。朝ドラ関係者はたくさん事前取材で、そうしたことを知っていたはずだから、余計にそう思うのである。そして、そうした論議の結果として、さまざまな被災体験モデルを、登場人物たちに語らせるのである。



【おかえりモネ】の主な登場人物～smalistblog.com より

最初登場する被災者感情をあらわにする者は、浅野忠信演じる漁師。彼は、大震災で最愛の配偶者を失っていた。そして、そこから立ち直れずにいて、頻りに問題行動を起こしている。突然に最愛の人を失う悲しみは永遠に癒されることはない。それを見事に描きあげた。

そしてその息子の亮を演じた永瀬廉との親子の葛藤場面は朝ドラとは思えないほどの緊迫感があった。父親を立ち直らせない息子と立ち直らなくてもいい

とし、いつまでも最愛の配偶者との絆を自主的に断ち切らずにいる父親。この構図は、きつと被災地にもあったことだろう。朝ドラとしては重すぎる場面だったが、見入ってしまった。

大震災後に被災地を離れた者を、「被災を真正面から受け止めつつ復興へと歩む重荷から逃げた」と非難する空気が同級生たちを分断する。モネも気仙沼を離れて登米市に移動した。そして次

選択していく展開となる。大震災後九年経って、ようやくこうしたことが語れるようになったのだ。多少の「衝突」はあっても、九年という時間を経たから、何とか語れるようになったのだ。

震災直後には触れることも出来ない話題だったのだ。そしてモネの家族の被災と九年後の展開。

まずはモネとモネの妹との関係の秘密もすこいものだった。

モネは津波に襲われた時には島にいなかった。それを妹に責められ苦しんでいたが、後に、妹のもつとすこい秘密が暴露される。

妹は津波が来る前に祖母に逃げようと説得を試みるが失敗して、結果、一人で逃げてしまったのが大きな心の傷となっていたのだ。

自分だけの命を優先した自分を許せずに、島を離れないことを自分にずっと課そうとしたことが明らかになる。

置いていった祖母はよその大人たちに救われたのだが、朝ドラでは、そのまま死んだのでは非難が殺到したであろう。

鈴木京香演じるモネの母親も、人に語れない秘密があった。

小学校教師だった被災当時、受け持ちの子供たちを捨てて、自分の子供を探し

に行こうとした自分が許せなかったのだ。

内野聖陽演じるモネの父親は最終的に、銀行員を辞めて、祖父の力キ養殖を継ぐ漁師になることになる。

祖父である藤竜也は、震災後に配偶者を亡くし、力キ養殖事業を復興させようとしているが、自分の代で終わらせ、親族に継がせようとは思っていなかったのだ。

途中から出現するそれぞれの被災の思い③

最後にモネの被災体験である。

前述のように、モネは島が津波に襲われた際に、島を離れていた。それがずっと心のしこりとなっていた。

その後、彼女なりに、被災体験をもとに、津波や風水害等の自然災害の予測と気象との関係を突き詰めようと、東京に出て、気象事業分野に進んでいく。

最終的には故郷に戻って気象事業で地元へ貢献しようとするが、その際にも被災地に残った人々からは温かく迎えられることはないが、めげず、あきらめずに進んでいこうとする。

こうして、実際の被災者ではないながらも、現実の彼らの置かれた状況を想起させる人物モデルを多数想定したドラマを展開しているのだ。

さまざまな被災をドラマとして語られたこと

筆者は、あまりにも生々しい被災体験直後には描けなかった状況下から十年を経過して、この朝ドラが放映されたことは大変意義のあることだと考えている。

いずれ誰かがやらなければならなかったことである。それがたまたまNHK朝ドラであったということだと捉えている。

以前にも何度も指摘したことではあるが、実際の被災体験をすべて網羅して論ずるなど不可能である。

被災体験は被災した人の数だけある。標準モデルなどありえないのだ。

しかも、その体験にはあまりにも落差がありすぎて、被災者同士でも語り合えないのが実情ではないのか。とはいえ、いつまでも、それぞれが孤立して、語り合えないのでは、体験を共有することもできない。

体験共有には芸術の関与が必要であると思う。

実体験を「捨象」して、ドラマを作り上げて共有するしかないのではないか。そうして多少なりとも癒されていくプロセスは必要なのではないか。

そんなことを考えさせる朝ドラであった。

当新聞の創刊号と第二号に登場していただき、今般の衆議院議員選挙で当選された2名の議員の方々、ご当選まことにおめでとうございます。これからも東北選出の議員として、東北再興のためにご奮闘いただきたいと思います。当新聞も陰ながら応援いたします！



立憲民主党・小熊慎司議員(福島4区)



日本維新の会・早坂あつし議員(比例代表東北ブロック)

プロフィール(当新聞第2号より抜粋・追加)

*現在は立憲民主党 福島4区

- 1968年6月16日(昭和43年)生まれ
- 1987年 会津高等学校卒業(第39回)
- 1992年 専修大学法学部卒業
- 1992年 衆議院議員新井将敬秘書
- 1999年 会津若松市議会議員当選(初)
- 2003年 福島県議会議員当選(初)
- 2009年 みんなの党入党
- 2010年 参議院議員当選(初)
- 2012年 衆議院議員当選(初)

プロフィール(当新聞創刊号より抜粋)

*現在は日本維新の会 宮城4区

- 1971年(昭和46年)3月11日仙台生まれ仙台育ち
- 昭和54年仙台市立八幡小学校卒業
- 昭和60年仙台市立三条中学校卒業
- 平成元年私立東北高校卒業
- 平成23年仙台市議会議員初当選
- 家族構成：妻と一女一男の四大家族。
- 現在、仙台市青葉区に在住民間企業出身の市民目線で政治に新風を吹き込もうとしている政治家

第87回 水産業再興のための料理レシピ紹介

11月ともなれば鍋ですね。たまには【アンコウ鍋】で温まるのもいいですね！

松本さんがお休みのため11月が旬の魚介類を紹介します！



姿かたちはグロテスクです



アンキモがたまりませんね

【三陸酒海鮮会】を制限なしで早く再開したい！

延期になってから、年が明ければ、もうすぐ2年になろうとしています。「酒つき宴会無制限解禁宣言」をいつまで待たせるのでしょうか？”感染者ゼロ”は永遠にないのだから早く全面解禁してはどうでしょうか、岸田総理！



ずらりと勢ぞろいした東北地酒ラインアッパー早く対面したいですね！

なぜ「東北七県」なのか 「その」最強」な理由

東北七県医療連携実務者協議会について

だいぶ以前に紹介したことがあるが、東北六県と新潟の七県の病院の連携実務者でつくる「東北七県医療連携実務者協議会」という集まりがある。連携実務者というのは、病院の体外的な窓口となる「地域連携室」(呼び名は様々である)に所属している、他の病院や診療所、介護事業所など、関係する機関と連携する役割を持った職員のことである。

病院と外部との連携が重視されるようになったのはここ20年くらいのこと、病院内の部署としては新しい部類に属する。当時、新設された連携室に配属された連携実務者は、手探りで外部と連携するための取り組みを行ってつながり築いてきた。例えば、外部にも開放した研修会の企画、広報誌の充実、そしてそ

した実務者同士が集う交流会や懇親会の開催などである。交流会や懇親会ではまさに「飲みニケーション」が行われ、連携実務者が重視する「顔の見える」関係づくりの上で大きな役割を果たした。

通常、そうした交流会などは二次医療圏について、都道府県の中で高度救急を除く通常の医療がほぼ完結するように設定された圏域内で行われることが多いが、中には都道府県全体の会を開催するところも出てきた。しかし、県境を越えた同じ地方の連携実務者が一堂に会する会というものはなく、この「東北七県医療連携実務者協議会」が恐らく全国初である。

二〇〇九年に第一回が仙台で開催されて以降、毎年一回、反時計回りに順番に七県のいずれかで開催し、最大で三六〇名の連携実務者が集まる大きな会となった。昨年と今年はコロナ禍で

会場での開催はできなかったが、今年はオンラインに切り替えて、十一月六日に開催することになった。そこで演者の一人として何か話してくれと要望をいただいた。私は連携実務者ではなく、ただの「飲みニケーション」好きの編集者ではないので、東北に思い入れのある立場から、そしてこの会を最初から見ていた立場から、「なぜ「東北七県」なのか」その「最強」な理由」と題して話すことにした。以下がその要旨である。この連載を読んでいただいている人には「耳タコ」な内容も多いかと思うが、しばしお付き合いいただきたい。

改めて「東北」の強み

「東北」と言った場合、多くは青森、岩手、宮城、秋田、山形、福島を指す。東北地方、東北六県、奥羽(陸奥国十出羽国)というのはこの六県のことを言っている。ただ、この六県に新潟を加えた七県を「東北」と言う場合もある。この場合は東北圏、東北七県、東北六県と新潟、奥羽越(陸奥国十出羽国十越後国)と言ったことが多い。七県が同じ枠組みに入る例としては、いわゆる東北三法、地方行政連絡会議法、全国総合開発計画、国土形成計画、北海道東北地方知事会議、東北経済連合会などが挙げられる。

いろいろな角度から見てみると、「東北」の強みが見えてくる。まず、七県の「GDP」を算出してみると、三八一億一四百万ドルでこれはヨーロッパの五十カ国と比べてみると上から一六番目に当たる。デンマークとフィンランドの間である。ヨーロッパの中堅国並の経済規模を持っているのである。

よく国内の食料自給率の低さが問題になるが、こと東北に関してはこれは当てはまらない。秋田の二〇五パーセントを筆頭に、山形、青森、新潟、岩手は一〇〇パーセントを超えている。福島と宮城は七〇パーセントだが、これでも全国平均三八パーセントの倍近くある。いざとなれば自給自足できるくらいの農業生産量があるのである。

日本の国土の五分の一は東北だし、全国の温泉の四分の一は東北に集中している。何度も書いてはいるが、ビールに欠かせないホップの九〇パーセント以上は東北で取れる。寒い地と思われているが、実は真夏日と真冬日を足した合計日数は、東北七県の県庁所在地はすべて上位十位以内に入っており、気温の面では暑くもなく寒くもない過ごしやすい地域であることが分かる。

意識しない支え合い、助け合い

もちろん、課題もある。人口減少、少子高齢化、医師不足を始め医療資源の少なきなど、いろいろ挙げられる。震災後はこうした傾向に拍車がかかり、「課題先進地域」とも呼ばれる。そのような東北に未来はあるのだろうか。

医療資源について見てみると、仙台のような都市圏には潤沢にあり、山間部や沿岸部では十分とは言えない現状がある。しかし、ではそうした地域に何もないかと言え、何も無いわけではない。その地域に行くとよく見ると、ある。高齢化率が50%を超える奥会津では、そこに住む人たちが当たり前のように日々行っている助け合い、支え合いの仕組みがあった。でも、それを本人たちは助け合い、支え合いだとはまったく思っていない。そのような、自然に相互に感さつと手を差し伸べる感じの支援の仕組みが、東北のそれぞれの地域にしっかりと根付いている。そうした仕組みはむしろ、仙台のような都市圏には不足しているようにさえ思える。

病院の連携実務者を始めとする専門職は、昨今どんな地域に出向いている。その際に大事なことは、そうした地域の中をつながり支え合うことである。側面から支援することであろうと思う。医療資源が足りないからと言って「何もない、何もできない」という認識の上に立たず、足りないところをそつと補う姿勢こそ

が求められると言え。東北は「やり直し」ができる場所

東北は「やり直し」ができる場所である。神武東征の折に殺された長脛彦の兄である安日彦は津軽へ、父崇峻天皇を蘇我氏に弑逆させた蜂子皇子は山形へ、やはり蘇我氏との争いに敗れた物部氏が秋田へ、源義経は奥州藤原氏を頼って平泉へ、その義経によって滅ぼされた平氏の平貞能が仙台市郊外へ、源頼朝の死後殺された梶原景時の兄影實は気仙沼へ、織田信長によって滅ぼされた武田勝頼の子信勝も東北へ、真田信繁(幸村)の娘や息子は伊達政宗の庇護の下で白石へ、など、神話の時代から東北に逃れる例は枚挙に暇がない。

岩手は奥州藤原氏が平泉に居を構えたように、東北の中心に位置する。その意識は当の岩手の人にはあまりないようだが、もつと持つてもよいと思う。

秋田は以前奥羽越現像氏がいみじくも指摘したように、前九年の役、文治五年奥州合戦、戊辰戦争などをみると、その動向が東北の帰趨を決するとも言える。秋田にそっぽを向かれないことが東北には大事である。山形の気候や文化は実に多様性に富んでいる。そうした多様性を踏まえてのアプローチは、東北全体にも敷衍できるものである。福島は北関東三県と接す

が求められると言え。東北は「やり直し」ができる場所

それぞれ県の持ち味

七県は一体感のある地域でありながら、それぞれに個性がある。青森は「北海道・北東北の縄文遺跡群」が世界遺産に登録されたことでも分かるように、北海道との交流が盛んだった。それは他県にはない独自性である。

岩手は奥州藤原氏が平泉に居を構えたように、東北の中心に位置する。その意識は当の岩手の人にはあまりないようだが、もつと持つてもよいと思う。

秋田は以前奥羽越現像氏がいみじくも指摘したように、前九年の役、文治五年奥州合戦、戊辰戦争などをみると、その動向が東北の帰趨を決するとも言える。秋田にそっぽを向かれないことが東北には大事である。山形の気候や文化は実に多様性に富んでいる。そうした多様性を踏まえてのアプローチは、東北全体にも敷衍できるものである。福島は北関東三県と接す

がれている。どんな問題か目の前に立ちただかろうと何とか乗り越えていけるに違いない、と私は思っている。

ましてや、同じ地域に暮らす七県の仲間たちがいる。共通の課題を抱える者同士、お互いの取り組みやその成果について情報交換することは、課題解決に有益なだけでなく、何よりとても心強いことである。

それぞれ県の持ち味

もつともつと交わろう、お互いを知ろう

とさえ、先にも述べた通り、日本の五分の一を占める広大な地域である。まだまだお互いに知らないことが多いのが東北でもある。だからこそ、もつと互に行き来し、情報を交換し、共有し、新たなつながりをつくり、共に課題を解決する方策を見つけ、実践して

いくことが何よりも大事である。そして、そうして実践してきたことを外に向けて発信していくことも東北の人にとっては重要である。東北には自ら誇らない人が多い。自分がやってきたこと、すこぶる高く主張したりしないことが往々にしてある。謙譲の美徳を備えているとも言えるが、いいことはいいと言っていくことも時には大事なことがある。そうした取り組みが、東北以外の地域にも助けとなる可能性もあるからである。

「その」ようなわけで、地域でのいい取り組があったらぜひ私までご一報いただきたい」ということと、「一年に一度この場に、それぞれの成果を持ち寄りましょう」ということを呼び掛け、私の話を終えた。今のこうして振り返ってみると、まったく大した話はないが、少なくとも東北についての思い入れだけは伝わったかなと思っている次第である。

執筆者紹介

大友浩平 (おおともこうへい)
奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。
「東北ブログ」
http://blog.livedoor.jp/anagnasi/



Facebook
https://www.facebook.com/kouhei.ohtomo

『未来独居老人』奥羽越現像と「未来世紀東北」の事

二〇一三年に筑摩書房から出た都築響一による著作で、一昨年は文庫化もされた『独居老人スタイル』という本がある。当時とても魅かれ印象付けられた本書のキャッチコピーは、「あえて独居老人でいる事。それは老いていくこの国で生きのびるための、きわめて有効なスタイルかも知れない」

「高年齢者の独り暮らし」(『未来世紀東北』)「そんな偏見を覆す十六人の人生の大先輩たちのマイクロ・ニルヴァーナ」という具合。(注:ニルヴァーナ、つまり「涅槃・解脱」である)

本書は社会の規範や常識を外れ一空気を読まずに自由奔放に、信念を持って



奥羽越現像氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、全国の旅の末、仙台に移住。どの本屋に入っても、とりあえず郷土本の棚に向かつて立ち読みを始める東北好きである。

店は東北大学農学部の移転もあつての客足激減という背景があり、これに昨年からコロナ禍も重なつての結果だが、事態は都心を離れた小さな町の話に止まらず、何と七月には仙台駅前に出店して二〇年を迎えていた大型書店ジュンク堂が突如完全撤退。「図書館よりも図書館らしい」荘厳な専門書店として都市人の知的欲求を満たしてきた空間の喪失は、多くの本好きに強烈なショックを与えた。

仙台にはジュンク堂より遙かに古くから支店のある丸善書店が更に仙台駅近くに店を構えるが、ジュンク堂は既にこの丸善の傘下にあつて、近年には吸収合併されていった。実際には両書店とも全国で苦戦を強いられていたのが現状だが、仙台では丸善や駅ビル内のくまざわ書店、サブカルチャーの名店・喜久屋書店など駅周辺に書店が集中しそれより外でも地下階にあるジュンク堂まで客足が伸びない、という事もあった

仙台中の土地に住み始めて十五年目に入ったのだが、最近特に界限が激しい変化の中にある、と感じている。自宅の近所である北仙台エリアでは、唯一の貴重な書店であり視聴覚媒体のレンタル店でもあつたツタヤが、続いて仙台市内のみに展開する文具店・赤井沢の支店が閉店した。無論、書店はネット注文普及の出版業界事情、文具

ある、それでも仙台には、個人が足を運ぶ店だけでも旧城下町範囲内で九店舗と、まだまだ書店の数は多い。人通りの多い立地の書店は客足もあり、今の段階で衰退と嘆くのは早計のようないふはしない。

むしろ問題と思われるのは、ジュンク堂のような中央資本の店が、云わば「そちらの都合で」多くが撤退してしまつたような場合、東北の、なかなかなく仙台の、ような都市はどうなるのかという点だ。よそ者なりに聞いたところでは、かつて外から進出してきた大型書店が、仙台地元の中小書店を次々に亡き物にしていった。その大型書店が今度は危機的状況となると、仙台には何が残るといふのだろうか？と考へてしまう。歳のせいとかコロナのせいとか、私の感度のアンテナが錆び付いたように最近では東北発の文学や芸能面など地元の挑戦や取り組みの話もあまり新しい動きが聞かれなくなつたと感じるし、かなり評判の悪い宮城県知事が、対抗馬が無力な為に結局再選されてしまうなど、一体これからの仙台や東北は大丈夫なのか？と暗い心持になる状況が濃厚という昨今の印象である。一見若者が多く活気がある仙台も、人口減少、少子高齢化最前線・東北の一角であり、先進的なビル街よりも、横丁飲み屋街の裏かれた雰囲気の中にこそ、人々の正直な、デ

カダン(退廃)的心情が表れているのかも知れない。ところで、私はこの年齢にして独り者である。おそらく軽度の強迫神経症や、孤独が全く苦痛でない偏屈な性格が要因なのだが、それで老後が孤独で不安はないかという、むしろ先の震災の時に「あの人大丈夫だったろうか」と余計なお世話ながら心配になつた「先輩独身者」の存在があつた。それが、ダダカン氏だつたのである。

ダダカン・糸井貫二氏は無事であつた。当時九十歳自宅で被災したが、それより数年前、屋根の修理中誤つて落下し入院しながら数日後には復活したというまるで不死身の肉体の持ち主なのである。それもそのはず、大正九年生まれの彼は少年期より器械体操に親しみ、何故か九州の炭鉱で労働に勤しんだかと思うと、戦時には鹿児島本土決戦に備え、爆弾を抱えて敵に体当たりするという特攻自爆兵としての訓練を受けたが、それも終戦を迎えたという壮絶な過去を持つ人物なのだ。そういう糸井氏もともと東北の人ではない。東京の豊多摩郡(今の西新宿)生まれで、詳細は不明だが戦後に離婚や過酷な労働からの健康被害を経て芸術活動に目覚めるも、両親の住んでいた仙台に移住し再婚したのだという。しかしその後また離婚し東京へ戻

って芸術活動を再開、そしてまた何故か大分県へ移住したりなどしながら、最終的に仙台へ落ち着いた？よなのである。彼は己の活動を始める契機をこう語っている。「何か好きな事をやろうと思つたんです。だってね、自分は殺されかけた訳ですから。軍部に、大日本帝国にね。」

ダダカンという異名からも察せられる通り、その芸術は「ダダイズム」(即ち既存概念の否定と攻撃的・破壊的な表現、反戦に加え「反芸術」をも範疇とする)の傾向を帯びていたが、具体的には自らの肉体を晒しての全裸街頭疾走行為、つまりストリーキングや、人造ペニスを額につけ女性器型玩具で性行為を模すなど所謂ハプニング・アートによつて機動隊や警官隊を動かさせては連行されるというもので、特に一九七〇年仙台・大崎八幡宮と祭にて裸参りに独り全裸で参加、同年大阪万博にて全裸で走りともに警官に取り押さえられた出来事、また岡本太郎由来のメッセージ「殺すな」を掲げて反戦や文化保護を訴えたパフォーマンスは名高い。一見全然カッコいい訳でもなく、むしろ非社会的で恥ずかしい感じすらして決しておおっぱりに賞賛できない内容とは言えども、単独行動に拘り、派手な衣装や仕草などの演出も告知もな

く、警察に対しても警戒や対策もない、極めて無防備で無作為な有様を、ある研究家は「虚飾や自己主張を捨て去りむき出しの自己をありのままに差し出す『禪的な自己放棄』であると評する。その表現方法は王道を逸脱して既成の概念を無視し、極端な奇行とも捉えられて長年美術界からは黙殺されてきた上、制作したオブリエや版画も人へ送るなどして散逸し記録として残らない為に半ば「伝説」的人物とされ、多くの仙台内外の芸術家から神格化さえされているとの事である。ある評論家によれば、無自覚な天賦の奇人ではなく、己が「異常者」のレッテルを貼られる怖れを自覚した上での決死の表現の繰り返しだつたのだという事だ。「ダダカンこそ、実は最も純粹且つ誠実に、あるいはまた正統に、美術の本質を体現した美術家ではなかつたか」(福住廉)

震災前年に仙台に氏を訪ねた山形県在住の舞踏家・森繁哉は言う。「始まりに、想念や意図があるのではない。そうしなければならぬところの自在な動きに、この人は忠実であつたのだ。その事がこの人のダダなのであつて、私たちはこの人の身に、多くの観念や思想を張りつけた時代への免罪符にしてきたのではないか。」

あらためて、何故ダダカンは仙台・東北を最終拠点としたのであるのか。成り行きと言つてしまえばそれまでかも知れないが、やはりここは異端者・反逆者が辿り着き、隠れ住む古来からのアジール(避難所・聖域・自由領域)なのだを再認識したくもなつてくる。

だが、「正統」「本流」を自負する芸術界が決して認めようとしぬ異端の士を、仙台・宮城はいざとなれば名誉市民として真に受け入れる懐を持つだろうか。

否、ダダカンはそのような称号を潔しとしないだろう。権威的なものを徹底的に唾棄し、その逆を指す事こそ、蝦夷の本懐。東北の地と人々は、その「異端」をありのままに受け止め、愛するだけではないのだ。

だが、実のところそれはラストではないかも知れない。現在の仙台には石巻発祥のヤマト屋書店や青森県八戸市から進出してきた書店・文具雑貨店「金入」といった地元東北勢が、出店場所やイメージ戦略なども巧みに健闘しており、もしかすると支店経済の綻びとともにしどとい、したたかな東北がそこかしこに芽吹き、復活を果たすその基点となるのかも知れないなどと思わせてもくれる。それを再び中央資本と利権で潰そうとする力が押し寄せるならば、私は掲げて走ろう。我が自由聖域・奥羽越東北を「殺すな」という、ダダイズム・メッセージを



「東京ビエンナーレ」でのダダカン氏顕彰企画『殺すな2021』より



石神 (乳神)



S L 銀河とススキ



山中の古社



月の出

シリーズ
遠野の自然
「遠野の立冬」
遠野 1000 景より

最近、世の中が非常にあ
わただしい。落ち着く間も
ない。
政治では、首相交代があ
り、すぐさま新首相による
衆院解散総選挙があり、メ
ディアの予想を裏切るよう
な結末を迎えた。



紅葉

また、コロナ感染者数は
突然に大幅減少して驚くば
かりだが、以前の急増も何
かおかしいと感じていた。
狐につままれたようだ。
そうこうしているうちに
もう十一月も半ばを過ぎた。
年内はあと一か月半もない。

あわただしい年だ。
これから先、天変地異な
ど起きないようにと願う。
遠野ももうすぐ冬支度が
始まるのだろう。秋の終わ
りを迎える「立冬」である。



ツツジ咲く」



遠野の夜明け



S L 銀河と撮り鉄

シリーズ【東北の災害の歴史】 第5回

今後もこのまま温暖化が進むと東北や日本はどうなるのか 縄文時代末期に起きた大規模南下の動きと逆の動きが発生するのか？

温暖化問題と昔の東北の自然環境の関係を数千年単位で考える

今回号では、近年の東北の災害問題ではなく、現在、地球規模で大問題とされている地球温暖化問題と東北の昔の自然環境との関係を考えてみたいと思う。

つまり、ここ数十年とか百年という時間軸ではなく、数千年から一万年以上の過去の歴史の脈絡、すなわち、縄文時代に遡って往時の状況を考え、翻って、これからの東北の問題を考えてみようということである。

大昔、東北には列島人口の多くが暮らしていた

現代では考えられないことであるが、縄文時代末期を迎えるまでは、日本列島の人口の大半は東日本にいて、東北も人口比率が高かった。このことはあまり知られていない。ただ、現代の日本の人口は一億二千五百万人を超えるが、縄文時代の人口は最大でも三十万人程度しかなく、単純比較はなかなかむずかしいのだが、人口比率からすればそうだった。

では、なぜ東日本や東北に人が多く住んでいたのか？それは、今よりも全体的に暖かだったからである。つまり、温暖で暮らしやすかったのだ。

青森・三内丸山遺跡は海のすぐそばにあった

有名な青森・三内丸山遺跡は、いまから約五千九百年から四千二百年前の大規模な集落跡である。

その当時の気候は、現在よりも温暖で、約二度ほど気温が高かったと考えられている。そのため、縄文海進といつて、温暖化のために、日本列島の海岸線は、今よりもずっと内陸側にまで進出していた。

最大で、今よりも二メートルから六メートル程度も海面が高かったのである。そのため三内丸山遺跡のすぐそばまで海が迫っていた。

左下の地図を見ると、三内丸山遺跡のすぐそばまで海が迫っているのが分かる。距離にすると、現在の海岸線から四キロメートルも海が内陸に進出していたということになる。

全地球規模で二度温かいということは具体的にいえるほどということなのである。三内丸山遺跡に限らず、他の列島地域の状況も同じであり、温暖化による縄文海進があった時代には、現代では陸地であるが、往時はかなりの面積が海面下にあったのだ。

「COP26」の「世界の平均気温上昇を1.5度以下に抑える努力」という意味

つい先ごろ、国連の気候変動対策の会議「COP26」がイギリスで開催されて、各

国の思惑が入り乱れてなかなかまとまらなかった。そのなかなかまとまらなかった議長案では、「世界の平均気温の上昇を1.5度以下に抑える努力を追求する」とした内容となっていた。

その提案でまとまらないということは、もっと温暖化が進むということである。その意味するところは、今から六千年ほど前の「縄文海進」を再び呼び込むことに等しいのである。

それは、太平洋に浮かぶ島嶼国(とうしょこく)が海面下に沈むだけでなく、多くの国の海に近い地域も海面下に沈むということでもある。

この会議も、こうした観点からのアプローチがあつたならば、少しは展開が違つたのではないかとも思う。

では寒冷化がいろいろあるのか？

温暖化が危険というならば、逆に寒冷化がいのかといえ、今度は寒くて暮らしにくい。海面が後退し、陸地が増えるが、寒くて住みにくい。

縄文末期に「ミニ寒冷化」が発生して、東北から人々がど

んど南下していき、結果として人口割合が減少したのと同じ状況が訪れるに違いない。

縄文時代には、森林の植生が変化し、食糧問題に直結して、生死にかかわる問題だったから南下したが、そうした食糧問題が多少なりとも解決した現代でも、人間は急には寒冷化に順応できないからである。

世界中の都市の気温上昇は命の危険レベルに

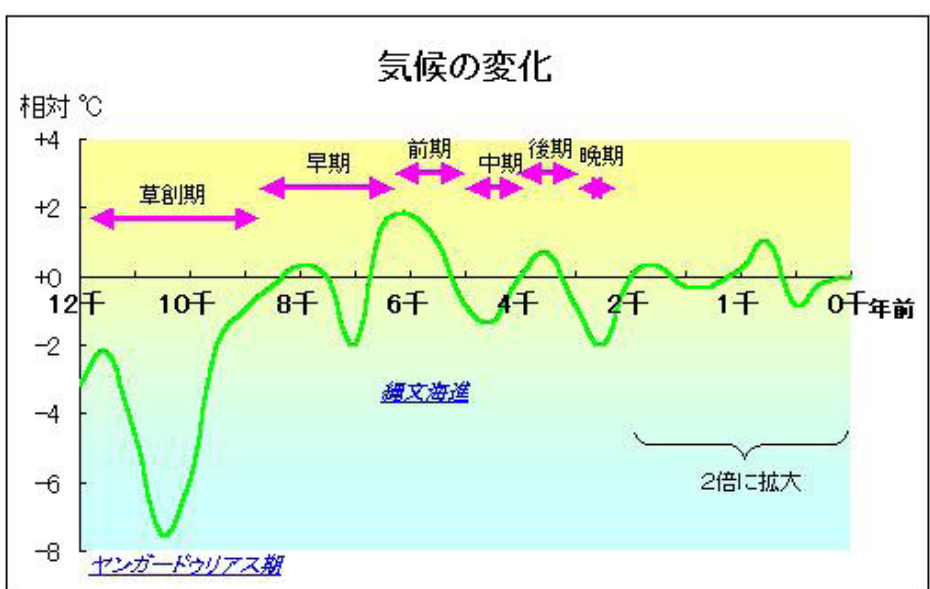
最近、世界中の都市の気温が上昇して危険レベルに達しつつあるという指摘がある。

それは地球規模の温暖化問題だけではない新たな問題である。

世界で最も引用の多い総合科学誌である「米科学アカデミー紀要」に掲載された新しい研究によれば、都市の気温上昇の大きな理由はふたつ存在するという。

まず世界的に人口が都市部に集中するようになったこと、そして地球温暖化の影響で年々都市の気温が上がっていることがその理由である。

これらふたつの原因で、ヒートアイランド現象等により世界中の都市の気温が上昇して生命の危険レベル



晩氷期以降の気候変動と文明の盛衰(安田、1996)
(年代は補正を加えないC14年代測定値にもとづいたもの)
『縄文文明の環境』安田喜憲著、吉川弘文館発行 参照

縄文時代の気温変化～『縄文文明の環境』一安田喜憲著より



縄文海進と三内丸山遺跡～地理院地図より

に達しつつあるというのだ。西暦2100年の日本の「未来の天気予報」で東京、名古屋が44℃！

今年の夏に開催された東京オリンピックでは、猛暑で大変な競技状態となったのは記憶に新しい。

日本にきた世界中の人々は、東京の殺人的な暑さに驚いたようだ。しかし、それで驚いてはいけない。環境省が予測した西暦二千百年の東京や名古屋の気温が摂氏四十四度という数字は、東京を逃げ出し、北海道や東北に脱出しようというブームが訪れるのかもしれないと喜んでばかりはいられない。なぜなら、前述のように、その時には、異常な海面上昇も襲ってくるのである。たかが二度程度の気温上昇と気温問題をあなどってはならないのである。



写真で
お伝えする
東北の風景

写真撮影
尾崎匠

【紅葉】

